

大東亞戰爭の報道風景

編輯局

昭和十六年十二月八日の夜明前、空はよく晴れて、下弦の月が西にかかつてゐた。宿直から昂奮した電話がかかり、あるひは「スグシュツシャヤヨ」の電報を受取つた誰しもは、はたと思ひ當り、この日この時に遅れてはと社へ馳けつづけるのだつた。

午前六時、大本營發表！帝國陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり東亞は生れ變つたのだ。日本は生れ變つたのだ。同盟も生れ變つたのだ。今となつては國內は勿論友邦も、中立國も、否敵國すらもが先づ何をさておいても同盟の聲を聴かんと耳を聳てゐるのである。かくて同盟編輯局は戦闘状態に入した。

内信部の直通電話に大本營から發表が送られて来る。七枚のコピーはバラ／＼になつて飛ぶ。市内の同報電話、西、北の専用電話、近縣の申込電話は一齊に發表を吹込む。片假名の國內放送、ローマ

古野社長 重任 畠山常務理事

古野社長、畠山常務理事は去る十二月二十六日をもつて任期満了のところ、十二月三日開催のわが社第二十二回理事會において、いづれも重任に決定した。

字の大陸放送、英語、フランス語スペイン語の海外放送といづれも間髪を入れぬ早業だ。内信部ではもう地名の解説だ、撃沈した敵艦のトン敷調査だといつてわめいてゐる。寫眞部では地圖だ。寫眞だ。と一ト騒ぎだ。この間青年團員が狭い編輯局内を飛鳥のやうに飛びかふ。正に戰場だ。十二月八日以來生れ變つた同盟編輯局の戰場だ。この戰場の一角東亞部には前線から中繼地を經由し、無電と電話によつて送られて来る原稿が日々堆高く積上げられる。常夏の前線に活躍する百名を超へる特派員の汗と血のじんだ原稿だ、翻譯しても翻譯しても翻譯しきれない程の量だ。わからない地名は多いし考へたこともなかつた住民の名も出てくる。戦線が延びるに従つて東亞部の仕事も殖へてくる。

この前線原稿はみんな査閲部へまはされる。査閲から大本營に送られ檢閲を受ける。夕刊、朝刊の締切間際、山と積まれた檢閲原稿をなんとかして締切に間に合はせやうとする苦心は並み大抵でない。東亞、外信を合せて一日の檢閲原稿は大本營だけでおよそ四、五十本、この他情報局の檢閲を受ける原稿を合すると相當な数に上る。

歐米の支局から「暫しの別れを告げん」との最後の電報を受取つた時の外信部には悲壯な色がみなぎつた。海外通信網は今や根本的變革を餘儀なくされねばならなかつたからだ。今こそは人知れぬ苦心によつて外電を集めてゐるのである。敵情をつぶさに知ることが戦争を勝利に導く重要な要件であり、それだけに外信部の使命は新たに重要性を加へたのだ。ニュースとして新聞紙面に現れるもののほか、情報部を通じて陸海軍および政府各局局に送られる通信は日に四、五十本に達してゐる。どの部も、どの係も戦争になつて忙しくならないところとなつてい。しかし前線から送られて来る原稿は「戦に勝たねばならぬ」と教へてゐる。勝つためにはわれわれも闘はねばならぬ。最後の勝利を獲得するまで。

陸軍省記者室

大東亞戦争勃發の日、陸軍省の狭い記者俱樂部は未明から文字通り芋を洗ふやうなゴツタ返す騒ぎであつた。午前二時頃、重大發表ありと報道部から通告を受け、社からの迎へ車で馳けつけたS、I兩氏のごときは幾度も繰り返してあの日の感激を語るのだつた。『日米開戦！に胸躍らせて深夜の街を疾馳する時、どんな戦況だらう。日本はどうなるのだ……そして全速力で走つてゐる車が遅くて仕方なかつたね！』

わが社の陣容は人数は少いがいづれも一騎當千のつはもの揃ひである。仕事の分擔も出來た。二人宛隔日宿直の勤務割も出來た。われから寢臺を二臺持込まれた。われらの長期戦の構へは即日出來たのである。續々發表され勇戦大捷の報に開

海軍省記者室

戦第一日の感激はやゝ緩められたが、發表の都度記者室は沸き立つてゐる。戦況發表の感激は今もなほ強い。發表を書取る者、運ぶ者電話に流す者、統制とれた陣容は各社の羨んでゐるところである。かくこれわれわれ陸軍省記者室の今日まで精進と、ほこり多い窮屈な寢臺生活をつづけてゐる。舊曆十五日我らの職場は思出も多い三宅坂から市ヶ谷高臺に移つた。移る當日は氷雨冷たく記者もボーイも一同苦勞した。

昭和十六年も暮れ、十七年の新春を迎へたが、われわれは眞實屠蘇の香に親しむ日はなかつた。暴米東亞侵略の據點マニラの陥落が目前に迫つてゐた。われわれには元日も何もない。一月三日マニラ陥落の發表を送つてほつとし、やうやく半舷上陸したのであつた。しかし戦線が擴大した今日、何時どんな大發表があるかも知れないだから宿直のものは毎夜十二時半



一時頃まで頭張り、奮闘してゐる海軍省記者室黒潮會は開戦と同時に、息づまる興奮と記者群のいきりで眞多といふのに蒸し風呂のやうになつた。二十疊敷の狭い俱樂部に五十人餘の人間が右往左往するのだから、その混雑ぶりは凡そ想像がつかう。しかし世界を驚倒させたあのハワイ海戦やマレー沖海戦の戦果の發表が凄絶極まりない當時の模様はみなこの二十疊のせまい俱樂部で發表されたのだ。われわれがこゝに朝から夜まで頭張らねば誰がこの素晴らしい戦果を、輝く勳を國民に傳へるか。かくして狭い記者室はわれわれにとつては、大事な誇らしい職場となつてゐる。

二階の報道部から發表文をしっかりと握つた將校が參謀肩章を波打せてた俱樂部に入つてくる。各社の直通電話が八本、普通電話が十本、このベールが一齊に鳴つて胸打つ感激の發表が行はれる。一人が發表の一字、一句を社(カット説明)十二月八日對英米開戦發表風景

年末に地方紙面を飾つた海軍座談會はM氏不眠の奔走の賜、また一月二日附發表されたハワイ海戦の第一報〇〇中佐の談は、發表まで同盟が終始中心となつて活躍し世が世ならば特ダネだ。スチームと人いきれに採まれ、差入辨當を三度々バクついて、纏詰生活もこの感激あればこそ、こよなくも楽しい仕事場である。

北支總局の事務所増築

資源の増産に、治安の強化に、華北はいま必死の活動をつづけてゐる。東亞共榮圏内における北支の地位は今更こゝで喋々するまでもないが、その華北の眼となり、耳となつて日夜休みなく活躍しつゝあるわが北支總局は、この秋、社屋の増築成ると共に陣容を一段と整備強化し、佐々木總局長以下三百名の日華社員が一體となり、報道戦士として遺憾なき職域奉公を盡しつゝある。増築された柱なし新編輯室(百坪)には總務、編輯、經濟、英文、翻譯、タイプの各部が頭張り、舊同盟編輯室には中華通訊編輯部が、舊中華通訊編輯室には通信部(無電)がそれぞれ陣取り同盟、中華兩編輯室合して二百餘坪の廣大な部屋に日々横



〔カット説明〕 北支總局増築事務所の一部

活躍を開始した

社員研究會

同盟の社員はみんな何か自分自分で發表すべき材料を持つてゐる筈だ。又持たねばならない。各々の職場に即し、これを深く掘り下げた研究發表會を毎日社内において相互に啓蒙向上に資せようではないか、といふ古野社長の熱心な持論が具體化して、『社員研究會』が設けられたのは舊臘大東亞戰爭勃發の直前であつた。戰爭勃發と同時に同盟社内は一齊にピンと緊張して各部局とも毎日忙しい日を送つてゐるが、それだけにまた一

全世界のニュースを東京から受けてこれを總局管内の支局と新聞社並に通信購讀者へ、また全華北に生起するニュースを蒐集して重要なものは東京へ、と北支總局が果す使命はなかなか重い。

既に北京は去る十一月二十二日水點下六度七分、身をさる朔風にも全員元氣いづばい報道報國に邁進しつゝある。

名譽の戦傷

魯南剿共作戰の火蓋が切られた昨年十一月五日、北支總局連絡員渡邊兵作君は右胸部貫通銃創を負ひ、〇〇野戰病院に收容された。この日午後三時頃九山(沂水西南三十キロ)東北方の戰鬪は激烈をきはめ、山腹の要害に據る敵を掃蕩するため、わが岡田部隊の將兵は地形の不利をものともせず、前

不揃ひを免れないが、開いてみた成績はなかなか素張りらしいものだ。毎回多數の社員が出席して、發表する社員の報告も豊富な内容を持つてゐるし、聴衆もいろいろと難かしい質問を提出して、みんな熱心だ。

そして、それらの研究報告は原則として發表者に原稿を提出して貰つて記録にとる一方、或は番外原稿に、或は特信に、或は經濟週報の原稿にと、それぞれ有益に活用されて行く。かうした状態が一年も続いたら、恐らく同盟通信の質的向上にも大した成績を擧げられると期待される。

進また前進をつづけてゐた。このとき渡邊連絡員は山上日映キメラマン、三枝眞實班員らとともに危険を顧みず最前線にあつて寫眞連絡に當つてゐたが、伏せから前進に移らんと立上つた刹那、敵弾を受けてどうと倒れた。しかし、かつては帝國軍人として聖戰に参加した歸還勇士の同君は重傷に屈せず「後は頼む」といひのこし、「天皇陛下萬歲」を奉唱して死を覚悟してゐた。幸ひ彈は右肺下部を貫通し、肝臓、腎臓に影響なきため危く一命をとりとめ、翌六日〇〇野戰病院に收容され、手厚い看護を受けた結果傷は日毎に快癒して行つた。

折も折、同作戰の前線視察ならびに將兵激勵のため支那派遣軍總司令官畑俊六大將は十一月十六日〇〇に飛來、特に渡邊連絡員見舞ひのため〇〇野戰病院に立寄りられ親しく見舞ひの言葉を述べられたに發表報告者を面喰はせてゐる。どうかみなさん、お互ひの啓蒙向上のため、この研究會をいつまでも同盟の誇りとして立派に育て上げて下さるよう御協力を願ひます。

一月月上旬までに開かれた研究會の日時、演題、發表者名を掲げると次の通り。
▽第一回十二月二十九日(政治) 大東亞戰と世界情勢
内信部 森 元治郎
▽第二回一月六日(東亞) 共榮圏の一環としての比島
東亞部 藤原 文雄
▽第三回一月七日(文化) 決戦下の娛樂問題
内信部 丸岡 辰雄

が、この意外の光榮に渡邊連絡員は傷の痛みも忘れ、たゞ感激の涙に咽んでゐた。

特派員家族慰安會

大東亞戰爭勃發とともに、わが社の海外特派員中には敵性國に擱禁されたものが多數にのぼつてゐる。

『われらの最後の仕事は終つた。今後如何なる事態に立到らうとも、これに處する用意を整へてゐる』
と覺悟の程を本社に報じて以來、牧内マニラ支局長が健在で救出された以外には全く消息がない。報道戦士の家族として充分な心構えは出来てゐるとしても、内地に残る家族の人々の心痛の程は察せられる。
本社では一月九日、これらの御

家族をエー・ワンに招待し、古野社長、島山常務以下出席して大東亞、萩原外信、小寺外經各部長からそれ〴〵任地の事情を傳へて一同を慰めた。
なほ當日出席されたのは左記特派員の御夫人又は御兩親十二名であつた。
ワシントン 加藤支局長
ニューヨーク 稻本 同
安保持派員 寺西(同)
木下(同)
サンフランシスコ 秋山支局長
ロンドン 皆藤(同)
ボンベイ 長谷川特派員
カタウイア 嶺山支局長
シンガポール 安藤(同)
マニラ(健在救出) 飼手(同)
牧内(同)

別所報のごとく同盟本社は今回日比谷公園の市政會館へ移轉した。市政會館は同公園西南隅にそびゆる高層建築物で、東京市管理の日比谷公會堂と背中合せに表玄関がある。社団法人東京市政調查會の所有にかゝり安田家の寄附金を基金に故佐藤功一博士の名設計に成るものである。延坪數三千四百六十六坪、ほかに公會堂分一千四百六十七坪、總延數四千八百八十三坪あり、南側中央部地上八階で標高百三十八尺六寸の時計塔を有し昭和四年十月竣工、輪奐の美をほこつてゐる。市政調查會は會館の貸室料を財源に廣く市政の調査研究を行つてゐる。別面の寫眞は都合により正面基部のみにとどめた。

▽第四回一月八日(經濟) 大東亞國の食糧問題
内信部 木村 昇
▽第五回一月九日(政治) 大東亞戰今後の戦局
内信部 住谷 金吉
▽第六回一月十二日(歐米) 外信部 海野 實
なほ各部門の開催日時は現在次の通りで、會場は今日まで電通ビル八階會議室を使つたが、市政會館に移轉後は四階會議室を使用しつゝある。

歐米研究會 月曜 午後三時
東亞部 火曜 午前九時
文化部 水曜 午後五時半
經濟部 木曜 午前九時半
政治部 金曜 午前九時

自分自分で發表すべき材料を持つてゐる筈だ。又持たねばならない。各々の職場に即し、これを深く掘り下げた研究發表會を毎日社内において相互に啓蒙向上に資せようではないか、といふ古野社長の熱心な持論が具體化して、『社員研究會』が設けられたのは舊臘大東亞戰爭勃發の直前であつた。戰爭勃發と同時に同盟社内は一齊にピンと緊張して各部局とも毎日忙しい日を送つてゐるが、それだけにまた一

